

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめ、発行しています。無料でどなたにでも差し上げますので、ご希望の方は、キリスト教センターへどうぞ。チャペルにも置いてあります。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(柏木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
—こどもの物語と聖書に見られるくしょうがい者>差別—
(荒井 英子)
- No.14. 「お父さん、僕はなに人？ —間 (はざま) から読む聖書—
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳—野宿生活者の現場から—」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィッシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)

目 次

- イエスはここにいるのです…………… 大宮 有博 (2)
- 完全な人…………… 石田 聖実 (6)
- 関係性があるからこそ…………… 長瀬 賢俊 (10)
- 不滅の感銘を与えるイエスの言葉…………… 岡澤憲一郎 (13)



イエスはここにいるのです

大 宮 有 博

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

(新約聖書 フィリピの信徒への手紙2章6～11節)

聖書が証する神

クリスマスはキリスト教主義学校が他の学校との違いを明確にさせることのできる季節です。例えば、キリスト教主義学校との間で交換されるクリスマスカード、クリスマスツリーやリースといった飾りつけ、クリスマスのコンサートそしてロウソクのともし火のもとで行われる燭光礼拝、こういったもの一つ一つが、私たちの学校がクリスマスの日にお生まれになったイエス・キリストのみ名によって建てられた学校であることのしるしであります。皆さんと一緒に今日、このようにして燭光礼拝が守れますことを心より感謝します。

クリスマスはイエスが私たちが救うために人間として、それも貧しいもの一人としてお生まれになったことを覚え、神様に感謝をささげる日です。そのような大切な礼拝で皆さんと共に耳を傾けています聖書の言葉はキリスト教の賛歌あるいは賛美の中で最も古いものの一つで

あります。たぶん、イエスが十字架でお亡くなりになられて10年ぐらいのうちにエルサレムの教会で作られ、地中海世界の教会に広まっていったのではないのでしょうか。この賛歌はイエス・キリストの生き方を讃えるものであります。賛歌の前半はこうなっています。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」キリストは神の身分であったとありますのは、神の身体からだという意味であります。イエス・キリストは神として永遠の昔から存在していました。ですが、神であり続けることにはこだわりませんでした。むしろ、イエスは神の身体を放棄して人間の身体をとられたとこの賛歌は歌います。なんのためにキリストは神であることをいったん放棄して人間の身体をとられたのでしょうか

か。この賛歌には自分を無にした、そしてへりくだったとあります。自分を無にして僕の身分になるとは、自分を明け渡して無償で人に使えるものの姿をとられたという意味です。そしてへりくだったとは自らを低いところに置くという意味です。人間の姿をとられたイエス・キリストは、自分を明け渡して人に無償で与えられることが可能な姿をとられたのであります。聖書の神は、旧約聖書から新約聖書まで一貫して神として高いところに座って人間を見渡す存在ではありません。聖書の描く歴史の神は小さい人々、貧しい人々、弱っている人々を探し出して救い出す方でした。たとえば、エジプトで奴隷であった民を見つけ出し、救い出しました。列強に支配され弱っているイスラエルを助けるために預言者を送り指導なさいました。神は常に高いところではなく、苦しむ人々、苦しみにある人々と共に低いところにいるのです。その聖書の神は次々と歴史に登場する国に植民地支配され続けるユダヤの人々にいったい神はどこにいるのかを、そして誰を救い出す方なのかを明確に示すために人間の姿形をとられたのであります。

その人間の姿形をとられたイエス・キリストは決してスマートな支配者ではありませんでした。もちろんイケメンのヒーローでもありませんでした。貧しい恰好をして当時の世界で最も弱い民であるユダヤ人の中でさらに貧しい人たち、病に苦しむ人たち、悲しんでいる人たちのただ中に生き、その人たちに仕えたのであります。そして身分の最も低いものが処刑される時に用いられる十字架という処刑具で人々の前でみっともない喘ぎ声をあげながら死んでいったのです。そのような人生をとることでイエス・キリ

ストは聖書が証する神が最も弱い人々を探し出して救い出すためにそのような人々のただ中に立っておられることを私たちに知らせたのであります。

パウロの思い

先ほどのキリストの賛歌の後半部分を読みます。「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」最後の行が明確です。「すべての舌」とは日本語や英語のような言語のことで、「全人類」という意味があります。主であるとは神であるという意味でありますから、イエス・キリストは神であるという表現になるのですが、これは信仰を言い表す定型文です。ですから、イエス・キリストの最も貧しいもの弱っているもの、小さいものに仕える生き方を通して、人はイエス・キリストを神であると認め、その生き方に倣うものとなることのできるのです。

このフィリピの信徒への手紙を書いたパウロは、この手紙の宛先であるフィリピの教会の中に、妬みや党派心による分裂があることを知り、それをいさめるためにこの手紙を書いたそうです。パウロはこの当時のキリスト者に愛されたキリスト賛歌を引用してキリストに倣う生き方を教会の人に勧めているのです。イエス・キリストが神であることを放棄して最も貧しいもの、弱いもの、小さいものただ中にお生まれになってその人たちに無償で仕えていたことを思い起こしなさい。そしてそのイエス・キリストを通して神が今どこにいるかを考えてみなさい、

そうすれば、妬みや党派心は馬鹿馬鹿しい、そういうことがわかるはずだ。そうパウロは考えてこのキリスト賛歌を引用したのでしょう。

キリスト教主義大学のありかた

さて、私たちの大学はキリスト教の中でもジョン・ウェスレーによって始められたメソジスト主義に立つ大学であります。メソジストの一つの特徴がこの主イエス・キリストに倣う生き方にあります。私たちが倣うべき生き方はウェスレーによると十字架に至るまで従順な生き方があります。そして、私たちはそのイエスの従順さを目指すことによって一つとなれる。十字架に至るまでの従順とは何か、それは見返りを求めることなく人に仕えることであります。これが実はメソジストの伝統を継承するキリスト教主義大学のありかたであります。

キリストの従順に倣って

私事にはなるのですけれども、私はこの大学に来て春には10年になります。この10年を振り返った時に、やはり重大事件はこの熱田移転でありました。9年前になります。移転した秋の大学祭の買い出しをしに名古屋中央市場の前の卸売の店で卵300個の領収書をもらいました。領収書の宛先に名古屋学院大学と書いてもらったら、社長さんが出てこられて「私卒業生ですよ。瀬戸からわざわざ買い出しに来てくださったんですか。」といわれて「いやいや、この先のところに移転してきました」というと、大変驚かれました。また5年前のことですけれども、急ぎの用事があって名古屋駅からタクシーに乗って「国際会議場の後ろにある名古屋学院大学に行ってください。」

とお願いをしたら、タクシーの運転手さんが振り向いて「お客さん、そんなところに大学なんてありませんよ。」ときっぱり言われました。「運転手さん、騙されたと思ってそこに行ってください。」と言って到着したら大変驚かれました。大学が地域に根付くということは本当に大変なことでした。しかし、考えてみると、今や熱田区にとって名古屋学院大学はなくてはならない存在になってきたのではないのでしょうか。例えばCOC事業の一つもそうでしょう。私たちの大学はイエス・キリストの従順さに倣ってこの地で大学という形にはこだわらず人に仕える実践を行ってきました。そしてこれからもこの地にあって、人に仕える実践を続けていくことでしょう。

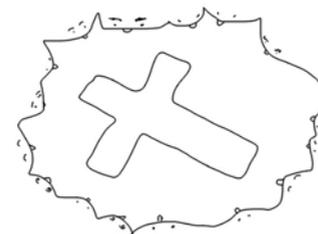
また、大学の特徴は危機に直面した時に明確にされると思います。私たちは今、クリスマス礼拝において暗闇の中で小さな灯りをともしています。暗い時ほど小さな灯りともして火は人の心を暖かくするものであります。およそ5年前に発生した東日本大震災の時、名古屋学院大学にとってキリスト教主義大学としてどこに立つかを強く問われた時であったでしょう。その中で本学の学生が名古屋のどの大学よりも早く被災地に行きました。この時を振り返るといつも考えるのは誰が私たちの大学をキリスト教主義大学にしているのかということでもあります。この時、私たちの大学をキリスト教主義大学にしてくれたのは間違いもなく学生の皆さんだったのです。そしてそれを支援する職員さんがいたということ、そしてそれを応援する教員がいたということも一つの忘れられないことでもあります。それから5年間私たちは被災地に学生を送り続けているということは名古屋学院大学は単

に教育研究を行う学校ではなく、主イエス・キリストの従順に倣い最も貧しい人たち、弱い人たち、悲しんでいる人たちに仕え、そしてその現場から課題を発見し解決を考える、真理探究の場であることの証であります。マリアとヨセフという貧しい家に生まれたイエスはやがて貧しいものに神の国を説き、私たちに世の光、地の塩となりなさい、テーブルに置かれた光は隠れることができないと力強く教

えたのです。

イエス・キリストが人間の体をとられたことを祝うクリスマス、私たちは決意を新たにしましょう。私たちの大学はメソジストの伝統を受け継ぐキリスト教主義大学としてイエス・キリストの従順に倣って、神が今立っておられるところを選び、人に仕える真理探究の場として日々刷新されながら前に進んでいきましょう。

(おおみや ともひろ 商学部准教授 2015.12.22 大学クリスマス礼拝奨励)



完全な人

石田 聖実

「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人さえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(新約聖書 マタイによる福音書5章38～48節)

完全主義者とは

「完全主義者」を辞書で引くと「不足や欠点を容認せず、完璧さを追求する考え方を持つ人。万事につけ完璧にしたがる傾向を持つ人」とあります。几帳面で、頑固で、何事にも融通が利かない人というイメージがありますね。フロイトは、排泄がコントロールできるようになる1歳～3歳頃に親から厳しい躰を受けると、几帳面、頑固、儉約といった完全主義的な性格が形成されるとしています。さらにこう

いう人にはその完全主義的な性格が原因で、強迫性人格障害になることがあるそうです。

さて、イエスさまが「あなたがたも完全な者となりなさい」という時、それは今言ったような完全主義者になれという意味でしょうか？そんなことではありません。イエスさまはユダヤ人ですから、旧約聖書の考え方が深くあったと思います。旧約では完全という言葉は「全き者」という言葉で出てきますが、特に神に献げる

いけにえの動物について言われています(日本語訳の聖書では「傷のない」という訳語が使われています)。犠牲の動物は牛とか羊や山羊ですが、私も皆さんもあまりこれらの動物に接したことがないでしょうから、猫を例に取りましょう。

私はこれまでに4匹の猫を飼ってきました。最初の猫は娘が拾ってきた茶トラです。なかなか賢い猫でエサは器に入れたものを食べ、近くに袋に入れたままのキャットフードがあっても手をつけません。冬は私がベッドに入ると潜り込んできてクルッと向きを変え、私と同じ態勢になります。2匹目の猫は白猫で、これは食い意地の張った猫で食べ物を見つくと何でもバリバリ袋を破いてしまいます。ドアノブに飛びついてドアを開けるという技を使います。3匹目は安城の友人が連れて来た黒猫で他の猫と仲良くしない孤高の猫です。狩猟が上手でスズメ、メジロ、ハトまで捕まえてきます。今うちにいる4匹目はグレーの猫で黙って座っていると美しいのですが、落ち着きのない猫で部屋の外から中に入れると騒ぎます。入れてやると間もなく今度は外に出せと騒ぎます。そして甘えん坊です。どの猫がより完全な猫なのでしょう？

実は全部完全な猫なのです。足が4本あって、耳が二つ立っていて、ヒゲがピツピツとあって、目が二つ明るさによって瞳孔が丸くなったり細長くなったりする。そして爪研ぎをする。そういう猫として当たり前の特徴が揃っていれば完全な猫なのです。ドアを開ける知恵や狩猟の能力がどのくらい優れているかは関係ありません。

神様が完全なように

そのような旧約の「完全」の概念を

知っていたイエスさまが「あなたがたの天の父が完全であられるように」つまり「神さまが完全なように」、「あなたがたも完全な者になりなさい」というのです。やはり無理な話ではないか、人間はどこまで行っても人間であって神さまの完全には行き着かないと考える人もいるでしょう。しかし、文脈をよく見て理解しないといけません。ここでは神さまというのはどんな方だ、と言われていますか？「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」方だと言われています。

「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるか。徴税人でも、同じことをしているではないか。徴税人というのはローマに納める税金を集める役人で、本来徴収すべき金額にかなり上乘せした金額を取り立てて、自分のポケットに入れていたと言われていました。そういう「不正」+「ローマのための徴税」ということで悪者の代名詞としてみんなから嫌われていました。「自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになるか。異邦人さえ、同じことをしているではないか」。異邦人とは単に外国人という意味だけでなく、ここでは異教徒、神さまを知らない人々という意味です。悪者や神を畏れぬ異教徒と同じことをやっているだけではだめでしょう、とイエスさまは言ってるのです。神さまは人を分け隔てせず、誰の上にも太陽を昇らせ、雨を降らせる。だから、あなたがたも「人を分け隔てせず、挨拶し、また愛しなさい」。これが言われている「完全な者」の具体的な内容です。そうすると、聖書が言う「完全」というのは、やるべきことのリストがあって、一つでも欠けがあってはならないという

ようなこと、つまり「完璧であれ」ということではなく、「誰に対しても善意をもって接しなさい」という、態度や意志の問題だということがわかると思います。

善きサマリア人のたとえ

ルカによる福音書には「善きサマリア人」というたとえ話がありますが、そこでもこの問題が扱われています。

旧約聖書に詳しい専門家がイエスさまにたずねました。「何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。イエスさまは逆に「旧約聖書には何と書いてありますか」と問い返しました。彼は専門家ですから即答しました「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』」。これは本学のスクールモットー『敬神愛人』の基になっている言葉です。ところでこの専門家は一気に答えましたけど、前半の「あなたの神である主を愛しなさい」は申命記、後半の「隣人を愛しなさい」はレビ記に出てくる言葉です。つまり、彼は旧約聖書の中から一つの箇所だけを選んだのではなく、二つの箇所を選んで一つにまとめたのです。そこに彼の旧約聖書の専門家としての有能さが表れています。イエスさまは彼のこのまとめに大賛成しました。そして、もうひと言付け加えました。「知識としては素晴らしい。あとはその通りに生きることだよ。そしたら永遠の命が得られる」と。「それでは、隣人とは誰のことですか?」というところからたとえ話が始まります。

イエスさまの時代、ユダヤ人とサマリア人はとても仲が悪かった。ユダヤ人はエルサレムとガリラヤを歩き来する時に途中にあるサマリアを通りたくないため

に、はるかに遠回りをするほどだったそうです。「善きサマリア人」というのはこんな話です。

あるユダヤ人が強盗に襲われて半殺しになっていた。そこをエルサレム神殿の祭司さまが通りかかったけど「自分も襲われたら大変だ」と思って、この人を助けずに急いで通り過ぎて行った。次に祭司の助手として神殿に仕えるレビ人と呼ばれる人が通りかかったけど、これも助けずに行ってしまった。最後に、ふだんユダヤ人とは関係の良くないサマリア人が通りかかったが、この半殺しになっている人を見て、傷の手当てをし、ロバに乗せ、近くの宿まで連れて行き、宿の人に2万円ばかり渡して治療を頼み、「これで足りなければ帰りに払います」と行って旅を続けた、という話です。イエスさまは旧約の専門家にたずねました。「三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。もちろん襲われた人を助けたサマリア人ですね。イエスは最後に言います「行って、あなたも同じようにしなさい」。

今の時代で言うなら、自動車と自転車の交通事故を目撃したとき、自転車に乗っていて投げ出されたのが自分の家族や友達だったら、もちろん救急車を呼んだり、警察に通報したりしますね。応急処置のできる人ならそれもやるでしょう。もしあなたが悪人だったとしてもそうするでしょう。でも事故に遭った人が自分に関係ない人だったら、あるいは自分とは関係の悪い人だったら、知らん顔して通り過ぎますか? イエスさまは事故に遭った人がどんな人であっても、通報し、あなたにできるなら必要な応急手当をしなさいというのです。もちろんちゃんとした知識がないのに、手を出すとか

えってまずいこともありますから、そこは医療関係者に任せるべきでしょう。そうして、自分にできること、できないことを区別して、自分に可能な事柄でその人を助ける。たとえ、自分にできることが119/110番通報だけであったとしても、それをする人が「完全な者」であるのです。

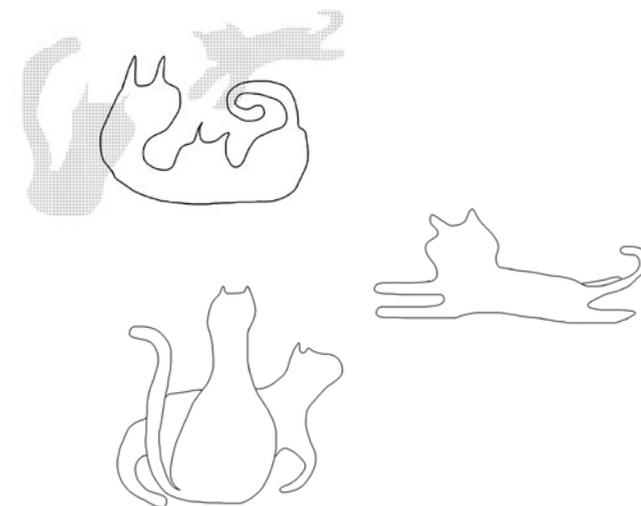
完全な人とは

聖書が「完全な者」というとき、それは完璧な人、欠点のない人、ミスを犯さない人ではありません。誰に対しても善意をもって接することをいつも心がける人を指しています。どうして誰に対しても善

意をもって接することができるのか? 神さまが全ての人を愛している、つまり、私は神さまに愛されているということを知っており、また神さまはあの人をも愛していることを知っているから、私はあの人をも愛するのです。

完全な者とは、神さまが私を、人を、愛して下さることを感じる人ということにもなりましょう。人の愛は移ろいやすいものです。でも、神さまの愛は永遠です。そして無限です。神さまの愛を感じ、そこから人を愛する人になっていただきたいと願っています。

(いしだ きよみ 日本基督教団鈴鹿教会牧師・本学非常勤講師
2015.10.27 チャペルアワー奨励)



関係性があってこそ

長瀬賢俊

ある本の紹介

今日は皆さんに『こころと脳の対話』という本を紹介したいと思います。この本は臨床心理学者の河合隼雄さんと脳科学者の茂木健一郎さんの対談集です。

河合隼雄さんは臨床心理学者として日本で初めて箱庭療法を導入された方で、これまで40年以上カウンセリングを続けてこられた心の専門家です。数ある功績から文化庁長官を務められました。残念ながら2007年に亡くなりました。この本はその翌年に出版されたものです。茂木健一郎さんについては、テレビなどでよく見たことがありご存じの方も多いと思いますが、脳科学者で、脳の質感、クオリアについて研究されている方です。茂木さんはこれまでに多くのメディアに登場されていますが、その中で私が一番好きなのは『プロフェッショナル 仕事の流儀』という番組です。この番組はNHKが製作する、毎回異なる分野の専門家に焦点を当てたドキュメンタリー番組です。その方が何に悩み、どう乗り越えてきたのか、学ぶべきところが多く、非常にクオリティの高い番組だと思います。

この番組の特徴のひとつは、二人の専門家が起こす化学反応だと私は思います。異なる分野の専門家が、ある部分で共感し、ある部分で互いに分析し、ある部分で新しい発見をする。そんな専門家同士の掛け合いが見ていて非常に面白く感じます。さて、今回みなさんにご紹介するこの本も、先ほどの『プロフェッショナル』のように二人の専門家、心の専門家と脳の専門家による掛け合いの本です。

通常、臨床心理学者と脳科学者の対談と聞くと皆さんは難しいことを想像されるかと思います。臨床心理学とは何か、脳科学とは何かなど。しかしながら、この二人の対話はそのようなことはなく、私たちにとってわかりやすい内容でした。二人の対話は初めから思わぬ方向に展開していきます。脱線するというか読み手の想像から外れていくというか。ただ、そんな話の中に私たちにとって参考となるキーワードがいくつか出てきます。読み手にとってどんなキーワードに興味を持つか異なるとはありますが、私が興味を持ったのは“関係性”というキーワードでした。

まず初めに河合さんがこんな話を切り出します。「近代科学は関係性を断って客観的に研究する。ただし、物理の世界ではなく、生命現象では関係性は不可欠である」簡単に言うと「人と本気で関わる場合、その人との間に関係性が大事である」という意味かと思います。この関係性について本の中にわかりやすいエピソードがありましたのでご紹介させていただきます。

関係性があってこそ

ある学校の話です。不登校の児童に対して行動療法が行われたそうです。学校に通うことができない児童に対し、ある教員が「まず部屋を一步出て、玄関まで行ってみよう」と声をかけ、玄関までたどり着くことができました。次に「家の前の角まで行ってみよう」と声をかけ、なんとかそこにたどり着くことができました。そんな小さなステップを繰り返し、その児童は学校

の保健室まで行くことができました。あと少しで教室に入れるという状況で、別の教員がその様子を見て、「お前、そこまで行けるならさっさと教室へ行って勉強しろ！」と言ってしまいました。その後、その児童が学校に来ることはありませんでした。

初めにこの児童と接した先生は児童との間に深い信頼関係、強い関係性があったと思います。玄関まで行くことは、一見小さなステップですが、この児童にとっては大きなチャレンジだったと思います。そしてそれをサポートしてくれる先生がいたからこそ、たどり着くことができました。この小さな、本人にとっては大きなステップを繰り返す中で、先生との信頼関係が強くなっていったと思います。そんな背景を少しも知らず、結果的には別の先生の一言で児童を傷つけてしまうことになりました。

しかしながら、ここで教室に戻るように叱った先生ですが、間違った発言をしているのかというと、私は決してそうではないと思います。確かに児童の気持ちを察しない一言だったと思います。ただ、学校という環境の中で先生が生徒に「教室に行って勉強しなさい」と言うことは間違いではありません。確かに他のクラスメイトは教室で勉強していますし、この児童は授業に参加することができていないわけですから。ただ、いくら正論だとしても相手に届かなければ、相手との距離がきちんと声の届く距離でなければ、きっと伝わらないし、時に相手を傷つけてしまうことに繋がるとは思います。きっとこのエピソードは正しいことも“関係性”がなければ伝わらないということを現していると思います。

話を聞く力

この関係性についてですが、心理学の世界だけなのかということだけでなく、私たちの身近でも大切なキーワードだと思います。

私がこの関係性について考え始めたのが、皆さんと同じ大学生の頃でした。先ほどご紹介いただきましたが、私は皆さんと同じこの名古屋学院大学を卒業しています。私は大学4年生の頃、留学から帰国してまちづくり活動に関わるようになりました。当時、名古屋学院大学で学生主体のまちづくり活動が始まっていなかったため、何かから始めてよいかかわからず、とりあえずその時にできることから関わることにしました。そして、その活動を通じ様々な人に出会うことができました。商店街のおじさんやおばさん、地域の小学生や高校生、他大学の学生、留学生にも会いましたし、町で頑張っているNPOの方、市役所をはじめとする行政の方々、障害を持っている方にも会いました。大工の方、農家の方、陶芸家、時には企業の専務や社長という企業の役職者や市議員の方とも接することがありました。このように様々な世代の人と接する中で、関係性の重要性に気づきました。

少し話しにくいのですが、当時の私は留学帰りということもあり、多少生意気な面がありました。そして、誰かと接する際、「負けちゃいけない！」と構えて人と接する時は決まって物事がうまく進まず、逆に謙虚にきちんとその人の話を聞こうと接すると自然といい関係が生まれ、何事もうまく進みました。ここで、私は自分から歩み寄ることがとても重要だと気付きました。特にまちづくりというのは自分一人では何もできませんから。そして、その少し後になってから、改めて考えたのは聞く姿勢の大切さです。言葉って気持ちを100%表現することはできないと思います。きっと今私が考えている気持ちを言葉に変換した時、表現できない部分もあると思います。もしかしたら80%くらいしか表現できていないかもしれません。そんな時、同じ文化や価値観を共有する友人や親しい間でしたら、その80%だ

けで相手に全てを理解してもらおうことができると思います。自然と足りない20%の部分を想像してもらえるとどうか。ただし、これが価値観を共有していない、まったく違う文化を持つ人だとそうはいきません。たとえば相手が小学生や自分の親世代より上の方とか、自分とは違う価値観を持つ人と接する時など。この20%の部分が足りず、相手が理解できず、場合によっては「あの人は話が通じない人だ」と誤ったレッテルを貼ってしまうことに繋がると思います。きちんと相手を理解するためには相手の言葉だけを理解するのではなく、その言葉の奥側まで想像してみないといけないと思います。その人が何を思っているのか、何を考えているのか、ちょっとした想像力が相手を理解することに繋がると思います。

相手の話をよく聞き、言葉の奥まで想像してみる。時に冗談や、一緒に過ごす時間も必要だと思います。少し自分の姿勢を変えるだけで、その人に自分の言葉が届くようになり、アドバイスや時に厳しい言葉というのも相手がしっかりと受け止めてくれるようになると思います。

Pray for Paris

最後になりますが、私は人と人との間以外にも、社会や出来事にも関係性があると思います。例えば日本や国際社会の中で自分がどう関係性を築くのか、もしくはある出来事と自分がどう関わっていくのか、そういった関係性を意識することも大事なことではないかと思えます。

2015年11月13日、今から2週間ほど前の夜の事です。フランスのパリで同時多発テロが発生しました。13日の夜にパリのサッカー場、劇場、レストランで同時多発テロが発生して132名の方が亡くなってしまいました。少しだけ想像してみると、もしかしたら、レストラン

で大切な人と素敵な時間を過ごしていたかもしれない。もしかしたら、サッカーが大好きな息子と一緒にゲームを観戦中だったかもしれない。もしかしたら、退屈な毎日のひと時に大好きなロックバンドのコンサートを満喫している最中だったかもしれない。それぞれにかけがえのない人生があり、それが突如として暴力によって奪われてしまいました。大切な人を失ってしまった家族や恋人の気持ちを考えると、その132名という数字だけでは表現できない重すぎる現実があると思います。実行犯はイスラム国のメンバーだといわれています。決して許される行為ではありません。けれども単純にイスラム国のメンバーに復讐すればいいのか、やり返せばいいのかというと、そうではないと私は思います。

なぜテロを起こさなければならなかったのか。ヨーロッパ、シリアで今何が起きているのか。私たちも少し考えてみる必要があるのではないかと思います。この背景には多くの人達の思いや利権、信仰や思想など、様々な事情が複雑に絡み合っています。きっと歴史を辿りながら少しずつひも解いていかないと理解することは難しいのではないかと思います。私たちが今回の悲劇に対して、無関心になるのではなく、一部のメディアに流されるのではなく、私たちにできること、その出来事との関係性をもう一度考えてみるのが大切なのではないのかと思います。

ヒントはきっと、人と人との関係性と一緒だと思います。物事を表面だけで判断し、頭ごなしに否定しない。真正面から正論をぶつけない。正論がきちんと相手に届く距離まで自分から歩み寄ってみる。言葉の裏に隠れている相手の気持ちを少し想像してみる。まずは自分の姿勢を変えてみる。そんな事が大切ではないでしょうか。

(ながせ まさとし 国際センター課長補佐 2015.11.26 カレッジアワー奨励)

不滅の感銘を与えるイエスの言葉

岡澤憲一郎

それから、イエスは群衆を呼び寄せていわれた。「聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである。」

(新約聖書 マタイによる福音書15章10～11節)

マックス・ウェーバーが絶賛した言葉

私がこれまで研究してきたドイツの社会学者にマックス・ウェーバーという非常に有名な人がいます。私はその人からキリスト教、あるいはイエスのことについて多くを学んできました。今日はその一端についてお話をしたいと思います。

今日のポイントはユダヤ教からキリスト教が別れてきた、その別れた瞬間の話です。さきほど福井さんが読みあげてくださいましたが、マタイによる福音書15章11節に「口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである」とあります。この言葉をウェーバーは“Das monumental wirkende Herrenwort”(不滅の感銘を与えるイエスの言葉)と絶賛しています。ウェーバーがこんなに何かを褒めるのはとても珍しいことなのです。私もウェーバーが絶賛したこのイエスの言葉、これに感銘を受けました。

隣人愛

ウェーバーは『古代ユダヤ教』という本に収められている遺稿「ファリサイびと」のなかで、ユダヤ教のエッセネ派と原始キリスト教の違いについてふれています。それによりますと、エッセネ派の人た

ちは清潔にかんする律法を儀礼主義的に優越させて、不浄な人びと、つまり身分の低い人びとに対して自分たちを遮断し、扉を閉ざしてしまっただけでなく、それに対してイエスは、身分の低い人びとと交わり、会食をした、一緒に食事をしたというのです。その文脈でウェーバーはこのマタイによる福音書の15章11節を引用しています。

イエスが生まれ、福音をのべ伝えたころ、ユダヤ教のなかで実権を握っていた人びとがいます。それがファリサイ派といわれる人たちと律法学者たちです。彼らはモーセによって与えられた613あるといわれています戒律、これを守るように同胞のユダヤ人たちに命じました。それらの戒律のうち、特にこの点がとても重要なのですが、割礼と安息日の休養は絶対に守れと命じました。割礼というのはご存知かと思いますが、ユダヤ教では生後8日目の男の子のおちんちんの先っぽ、包皮を環状に切り落とします。これが割礼です。痛いですよね。今でも行われているそうです。これはユダヤ人がユダヤ教徒であるための宗教儀礼なのです。これを絶対に守りなさいと命じました。そしてもう一つは安息日の休養です。ユダヤ教では金曜日の日没から土曜日の日没

までが安息日で、いわゆる日曜日にあたります。この時は働いてはいけないというのです。

しかし、実際には守れない、割礼でいえばわが子にそんな痛い思いをさせたくない、安息日でいえばたとえ安息日であろうと働かざるをえない、そういう貧しい人たちがいたわけで、その貧しい人びとに向かって、ファリサイ派の人たちは「田舎もの」「無知のもの」と呼んで同胞の貧しい人びとを差別したのです。この差別に対して貧しい人びとの側に立って戦ったのが実はイエスであったわけです。

ガラテヤの信徒への手紙5章6節に「キリスト・イエスに結ばれていれば、割礼の有無は問題ではなく、愛の実践を伴う信仰こそ大切です」とあります。イエスにとっては割礼などはどうでもいい、尊いのは愛によって働く信仰だけであるというわけです。ある時ひとりの律法学者がイエスをためそうとします。「先生、律法のなかで、どのいましめがいちばん大切なのですか」とイエスに向かって質問しています。そのイエスの答えが「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二もこれと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」でした。

なぜイエスはこのようにいったのでしょうか？そこが大事です。つまり、イエスにとっては割礼や掟などはどうでもいい、素直な気持ちで神を愛することが重要なのです。それではなぜ隣人を愛しなさいといったのですか？ファリサイ派の人たちが貧しい同胞のユダヤ人たちを「田舎もの」「無知のもの」といって差別していたからです。だから隣人を愛しなさいとイエスはさとしたのです。とても大

事なところですよ。このイエスの言葉は本学の建学の精神であると同時に、ユダヤ教からキリスト教が分岐した、別れたその決定的な瞬間なのです。

マタイによる福音書15章2節にこう書いてあります。「『なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗っていません。』」フランスの歴史学者マルセル・シモンによりますと、イエスの直弟子たちは母マリアを筆頭に120名ほどいたとされています。おそらく戒律のなかに食事の前には手を洗えというものがあるのでしょう。イエスの弟子たちは手を洗わずに食事をしていました。それを見つけたファリサイ派や律法学者たちは「お前の弟子たちが言い伝えを守らず、手を洗わずに食べているのはどうしてなのか」と問い詰めているわけです。そのイエスの答えがマタイによる福音書15章11節です。「口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚す。」手を洗わずに食べたって人は汚れない。口から出てくるものってなんでしょうね？そうです。言葉です。なぜイエスはそんなことをいったのでしょうか？それはファリサイ派の人たちが「田舎もの」「無知のもの」といって貧しい人びとを虐げていたからです。

「口から出てくるものが人を汚す」

マックス・ウェーバーは、正確には、マタイによる福音書15章の18節から20節までを要約したものを書き加えてこの11節を不滅の感銘を与えるイエスの言葉として絶賛しております。私の考えでは、ウェーバーが絶賛した理由は、人間の社会における宗教を超えた真理をいい当てているからではないかなと思います。口には気をつけなさいといいますよね。悪

い心のなかから出てくる言葉は人の心を深く傷つけてしまいます。イエスが昔にそれを指摘していたわけですよ。今の社会では子どもたちのイジメによる自殺、職場の上司によるパワハラ、セクハラ、こういうものによって苦しみ、悩んだすえの自殺などが多発しています。これらはいずれも、隣人愛とはほど遠い思いやりのない言葉が原因です。

ぜひわが大学の建学の精神、「心を尽く

(おかざわ けんいちろう スポーツ健康学部教授 2015.5.1 カレッジアワー奨励)

し、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」「隣人を自分のように愛しなさい」、これと並んで、ウェーバーが絶賛している不滅の感銘を与えるイエスの言葉、「口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚す」というイエスの言葉を心に留めておいてください。

